

狛江市の市制施行50周年を記念して名誉市民が創設され、第1号として絵手紙作家の小池邦夫さん(79)と映画監督の木村大作さん(81)が決まった。絵手紙の創始者として40年以上にわたって普及や創作に精力的な活動を続けている小池さんに話を聞いた。

名誉市民について■木村監督と一緒に選ばれたことが、すごくうれしいです。絵手紙は芸術ではなく大衆的な活動として低く見られがちでしたが、自分が45年間住んでいる町から認められ、応援してもらうのが大きな喜びです。狛江市は平成19年度から「絵手紙発祥の地—狛江」として絵手紙を文化施策の柱として事業をしてきました。事業を推進する「絵手紙発祥の地—狛江」実行委員会の委員の方たちが学校で絵手紙を教えたり、市民に絵手紙教室を開いたり、さまざまな活動をしていきます。その活動は僕自身の支えになっており、今回の名誉市民につながったと委員の方たちに感謝しています。絵手紙の誕生■幼い頃に近くの神社の鳥居に彫られた郷里松山市の書家三輪田米山の書に感動し、芸術を尊敬する家族の勧めで9歳から書道を続けてい

絵手紙をかく喜びを広めていきたいと思っています。

ました。東京学芸大学書道科に入学しましたが、先人の書をなぞるだけの授業に失望しました。人見知り友人が少なかったこともあり、19歳の時に中



学時代からの親友にはがきや手紙を毎日送るようになり、それが絵手紙の原点になりました。作家の瀧井孝作さんや画家の中川一政さんに触発されて家に押しかけて師事を請い、中川さんの家へ毎月通って絵をかくようになりました。絵の経験はなかったのですが、「書がかけたら絵もかける」と中川さんに言われ、じっくり観察して一気にかく

ことを覚えました。また、うまくかこうという雑念をなくし、集中力を高めるため、筆先と逆の端を持ってかく方法を思いつくとともに「ヘタでいいヘタがいい」という言葉も思いつきました。こうした積み重ねから、はがきに絵と言葉をかく、現在の絵手紙が生まれました。墨画家になった大学の先輩にも刺激を受けて、芸術家として生きる決意を固め、卒業まで残り2単位だったのですが、大学を中退しました。普及に取り組み■昭和53年発行の『季刊 銀花』37号(文化出版局)の綴じ込み企画として絵手紙約6万枚をかき、作家として認められ、絵手紙という言葉も生まれましたが、一般には知られていませんでした。56年に「ふみの日記念イベント」として狛江郵便局で初めての絵手紙教室が開かれ、講師を務めました。その後、全国で教室が開かれ、テレビの番組にも出演し、多くの人に絵手紙の楽しさ、おもしろさを知ってもらう普及活動に力を入れるようになり、日本絵手紙協会を設立しました。絵手紙をかく喜び■多摩川住宅のアトリエへ自宅から歩いて通って、毎朝9時から夕方まで創作を続けています。毎日絵手紙20通ほどをかきますが、その日の自分の気持ちや季節の変化を感じることが出来ます。狛江の子どもは学校で絵手紙を体験しますが、その体験が将来きっと財産になると思います。これからも、絵手紙をかく喜びを広めていきたいと思っています。

老舗めぐり

◆ 93 ◆

多彩な電気部品を販売する総合商社

株式会社三真(猪方3-23-2)は制御部品、電子部品、ケーブルなど多彩な電気部品を扱う総合商社で、創業からほぼ半世紀を数える。

創業者の本田功さん(79)は、宮城県加美郡色麻村(現・色麻町)の農家に生まれた。子どもの頃、電気店でラジオを修理してもらった経験から電気に興味を抱いた。地元で就職が難しかったため、高校を中退し東京に住む親戚を頼って上京、豊島区の自動車工場働きのまま、定時制高校に通った。高校卒業後に横浜市へ転居、大田区の通信制の電気専門学校で学び、卒業後は東芝に約3年間勤めた後、友人の紹介で電気部品卸売会社に就職、秋葉原の問屋街などでの仕入れ方法や営業のノウハウを学んだ。その後、渋谷区幡ヶ谷に転居、近くの居酒屋で狛江市出身の妻美智子さん(75)と知り合い、昭和44年に結婚した。45年に長男の慎一さん(49)が生まれた直後、



本田功さん(前列左から2人目)、慎一さん(その右)と社員たち

継ぐ頁

勤務先の社長が失踪し会社が倒産した。功さんは受注していた品を自分の信用で買い付けて取引先に納品するなど、自己責任で残務整理を果たした。その結果、大口取引先の課長から独立を勧められ、秋葉原の部品問屋の支援も得て46年に狛江市岩戸南の妻の実家の物置に机と電話を置いて事務所とし、「三真電子機器商会」を設立した。

当初は世田谷区祖師ヶ谷大蔵のアパートから子連れで通い、功さんは仕入れと配達、美智子さんは電話番と経理を担当。電気関連の部品以外にもネジや機械掃除用の布なども納品した。独立を支援し、現在も取引先がある工作機械やアミューズメントマシン、自動車関連などのメーカーの成長とともに業績と取引先が広がり、49年には現在の社名に変えて法人化した。

その頃はオリジナル製品も販売したが、2年ほどでやめ、業務を部品の販売にしぼった。大手電機メーカーなど取引先が増え、52年頃に狛江へ転居し57年に駒井町に自宅を新築、1階を事務所にした。その矢先、高額の不渡り手形をつかまされ倒産の危機

に陥ったが、顧客の応援と親の援助で乗り切った。その後も不渡り手形などで資金繰りに苦労したこともあったが、多くの人の支えで乗り切って事業を拡大、平成7年には自宅横の家を買って事務所を広げた。

現社長の慎一さんも少年時代から電気に興味を持ち、大学で電気工学を学んだ。卒業後、スイッチメーカーに就職したが、数年後に家業を継ぐことを決意して退職。功さんは、息子と取引先と一緒に回って営業のノウハウを教えた。慎一さんは主に営業を担当、26年に社長に就任し、功さんは会長として経理や金融機関などの折衝を行っている。28年には和泉多摩川駅近くの現在の場所に功さんの自宅を兼ねた本社ビルを建設し移転した。現在はパートも含め10人が働いている。

功さんは「正直にコツコツと仕事をしてきたお陰で、危機も何度かありましたがその度にたくさんの人に助けられました」と話すとともに「電気業界は技術の進歩が早く、常にアンテナを張って新しい知識や情報を集める必要があります。また、受けた注文をただこなすだけではなく、新製品を勧めたり、最新の知識を提供するなど、積極的な営業も必要です」と話している。(株)三真 ☎3480-2490、営業時間=午前9時~午後6時、土・日曜、祝日休み

昭和46年に物置からスタート/数々のピンチ乗り越り成長

Start & Challenge

21日に狛江駅付近で「キャンドルナイト灯と人」

多摩川キャンドルナイト灯と人実行委員会(平方慶太委員長)と狛江市が共催で21日午後4時30分~8時30分に「多摩川キャンドルナイト灯と人」を開催する。

同会は東日本大震災後に自粛ムードが強まる中、地域を明るくし、環境問題やスローライフなどについて考えるきっかけにしておうと結成。



昨年のキャンドルナイト

平成23年から多摩川などでキャンドルナイトを催している。今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会場を狛江駅から徒歩圏内の広場に変更、滞在時間を限定して入れ替え制とし、事前予約制にするなどの対策を行う。市民公益活動事業補助金のチャレンジ補助金を受け、会場にキャンドル2,000本を並べ、キャンドルアートを行うほか、アコースティック主体のライブも催す予定。事前予約は多摩川キャンドルナイト灯と人ホームページ内から申し込む。参加費はおとな500円、小学生300円、乳幼児無料。アコースティックライブはYouTubeでオンライン配信する。

平方さんは「新型コロナウイルスの猛威の中で、地域に希望の明かりをともしたいので、狛江市内の多くの人に来てほしい」と話している。

公募展受賞の小・中学生12人を表彰 小池邦夫さんの作品を市役所に展示

絵手紙公募展の子どもの部の表彰式が9月27日(日)に中央公民館で行われた。選考委員長の小玉真砂子さんは「選考には非常に頭を悩ませましたが、絵手紙に添える言葉を重視して選びました」と話していた。受賞した子どもたちは「初めてかいた絵手紙が選



受賞者と松原市長(後列左から3人目)

ばれてうれしかった」「コロナで休校中の課題だったので、受賞を聞いてびっくりした」と話していた。

これに先立って「狛江市まるごと美術館」の第一弾となる展示コーナーのオープニングセレモニーが行われた。

市内在住の絵手紙作家で名誉市民の小池邦夫さんの



まるごと美術館の絵手紙展示を見る松原市長(左)と小池さん

ひろがれ 絵手紙の輪

作品を多くの市民に鑑賞してもらおうと、市役所2階ロビーの展示ケースに狛江駅北口ロータリーの巨大絵手紙の原画などを展示するもの。松原市長は「絵手紙と狛江の両方を楽しんでもらえるようにしたい」、小池さんは「狛江をまるごと美術館にしようというのはすばらしい発想」と話していた。